

自分は、こうしてPCに向かう時も読書する時も、TVかラジオかCDをかけている。更に、防水ラジオを浴室に持ち込む程、いつも人工音が何となく耳に入っている。覚えれば、40年前に下宿の部屋でTVを見ながら書いたぐらいだから、こうした「ながら癖」は長年の習慣か。

先の「音楽力（「雑学」バックナンバー - 書籍等読後感関係（ ）P 2005. 5. 9. : 参照）」の中の「自然界の sound of silenceこそ音楽」が気に留まっていた折、書評で「ロング・ドリム - 願いは叶う - 」が目にとまり購読した。

数年前に著者の第2回NHK学園「自分史文学賞」を受賞した「鳥が教えてくれた空」を読み、自然界の音に関するエッセイが印象に残っていたので、sound of silenceをより理解できるかなと思った次第。

著者は4歳の時に病気で「sceneless（全盲）」になったが持ち前の旺盛な好奇心から、高校時代に米国に留学、また、大学でフランス文学を専攻し、大学院へも進学し、卒後は外資系通信社に勤務のかたわら、エッセイストとして、第49回日本エッセイスト・クラブ賞も受賞している。

エッセイ集である「ロング・ドリム」は、sound of silenceへの示唆を得るには、打って付けの書籍であった。

朝の雀の鳴き声を聞き分けて、時間や季節の流れを味わっている。また、枯れ葉の散る音に紅葉を見ている。

正に、聴覚、触覚、嗅覚による「sound of silence」の味わい方を示唆してくれた。

また、聴覚、嗅覚による歌舞伎観劇、大相撲観戦、香道、味覚による食の道、等々のエッセイも。街中にたたずみ、街の騒音もよく聞き分けると、音の地図が作れ、時間によってその地図も塗り替えることもできるという。

淡々としたエッセイの中に、scenelessの方への声かけ、配慮の仕方、接し方のヒントも多く感じ取れた。

人工音の「ながら癖」のある自分は、何か別世界が開けるような気がして、もっと「sound of silenceに聴き入り、聴き分ける癖」を着けたいと思うようになった。まずは、さし当たり「ながら癖」は辞めてみるかぁ～。

著書名の「ロング・ドリム」とは、著者の好奇心旺盛な証である「夢が叶うかどうかはさておき、夢を持ち続けたい」ということから、名付けられているよう。

私も歳を重ねることにお構いなく、まだまだ「ロング・ドリム」を持ち続けたいと思う。